

# 松葉屋通信



「山と森、木と人々の暮らし」を一本の糸でつなげたい

木を選び、家具をつくる。

その仕事を極めることが私たちの役割だと思っていました。

しかしそれはほんの一部分ではなかったでしょう。

山があり、長い年月の中で森が繁り、木が育ち、さまざまな製品が生み出される。

そのなかで、たくさんの方の思いが込められ、たくさんの方の力が

かけられていることをもっと知らなければいけないと感じました。

「山と森、木と人々の暮らし」を一本の糸でつなぐ。

すべてを一度に知ることはできませんが、すこしずつ解きほぐし

みなさんにお伝えしたいとおもいます。

今回は森や木について、様々ななかかわり方をされている

4人の方に会いに行きました。



インタビュー

高島 かよ子 さん

お箸づくりを通して森と人を繋げる活動を行う高島さん。幼少期から森で過ごし、林業を学びお仕事にされ、地元の木を使ってお家を建てた体験から、森や木への想いをうかがいました。

### 木のことを学んだ学生時代

本当に好きな大学に行っていたいいんだったら、やっぱり山の中がいいから信州大学農学部林学科を専攻したんです。しょっぱなから鉦と地下足袋を用意されて木を切ったり、下草刈りしたり。

その時に、先生や助手のおじいちゃんたちが、すごい早さで急斜面を移動しててなんです。そうしたらそれに憧れてしまいました。

自然保護は気になっていましたし、木を切っちゃうとかかわいそうとか、しゃべれない鳥や木って人の好き勝手にされてる！ってそんな思いもあったりしたけど、一生懸命に木の仕事をしている人たちに出会って、使う木と付き合っていていけるって、なんて素敵なんだろって思ったんです。

### 地元の木で家を建て、

### 森と人をつなぐお箸づくりへ

ある人のお家に行ったら、床がツヤツヤで。そこのおばあちゃんに「何か塗ってるの？」って聞いたら「何も」って、家を建てた時に米ぬかで磨い



山桜を伐採した時の写真

ただけだって。それが山桜だったんですけど、使っていくとだんだん油が乗ってよくなっていくんだよって。私はそれまで、モノって使うと段々悪くなるっていう価値観だったので、段々よくなるってすごいなって。それで、自分の家も山桜にしようって。

運よく大工さんから、間伐しているところで山桜が生えてるんだけど、高島さんが山桜にしたいなら持ち主と交渉してみたって言ってくれて。伐採したのが3月10日なんですけど、花が咲いていたんです。山桜なんて大体4月の終わりくらいに咲くの。満開の山桜を目の前で切ったので、かなり落ち込んでしまったんです。「切られたくなかったんじゃないか」って。

そうしたら、木こりの方が「牛も豚も同じだよ、命をいただくってことだからね」って。「高島さんが使うことでまた新しく木の寿命が延びるんだよ」って言われたんです。板にひいている時に見たらきれいなんですよ。これを無駄にしたらそれこそ罰が当たると思って、端材も全部引き取ったんです。それでお箸づくりが始ったんです。

桜の木を捨てれば罰が当たるから粗末にしないようにって始めた箸づくりは、悪いことなんてなんにもないし、私らしく生きる大事なパートナーになってくれると思うんです。

私は杉も好きなので、お箸づくりで使っているんですけど、杉は戦後に人が植えたものがほとんどなので、何十年後に使われることを考えて育てたものなんですよね。立ち枯れたり、腐ってしまったら一生を終えるよりは、使われて寿命が延びるっていう、そういう考え方で木も使われた方が幸せということもあると思うんです。

高島かよこさんのお箸づくりを体験されたい方へ  
連絡先 TEL : 090-5399-6257  
Mail : sumikotaro-hanadonko22@docomo.ne.jp



インタビュー & 対談

長野地方事務所 林務課 普及係

小池 一成 さん

森林には2通りの姿があります。環境としての森と産業としての林業。その2つを通して長野県の森の現状を教えてください、私たちが「木を使うこと」について考えました。

### 林務課のお仕事

林務課という名の通り、林の関係の業務なんですけど5つの係があって、役割で分けると大きく2つあるんです。まず、治山係と林道係は、山から土砂が流れないように堤防をつくったり、山の崩壊地を修理する公共事業を計画して自分たちでやって、林業をするための道づくりもしています。

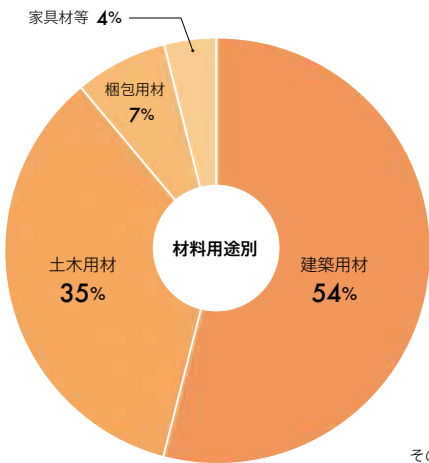
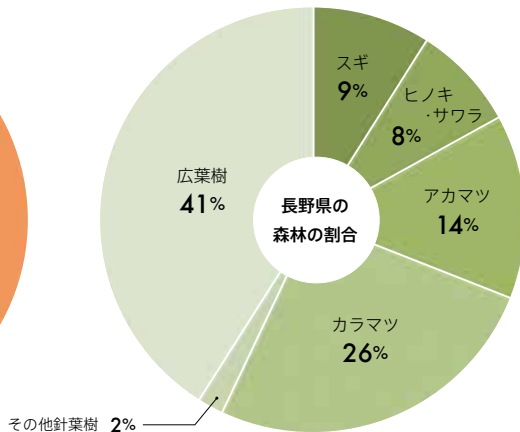
次に、林務係と林産係と普及係の3つは、林務係は鳥獣害対策や狩猟の指導を主にしています。

林産係は、林業をやっていくための補助事業を行う係で、木を植えて育てる間全く収入がないと成り立たないので、手入れをして土砂を防ぐなどの森を守る期間の手助けをしています。

普及係は「こういう補助事業がありますよ」とか「こういう研修がありますよ」とか、アドバイスみたいなことをしています。作業は現場の皆さんの方が技術的に私たちより上なので、林業をやりにやすくしたり、興味の少ない森林所有者や地域の方にお話をして、木を切り出すためのお手伝いをしています。

### 長野県の森林

長野県は8割が森林なんです。針葉樹が6割、広葉樹が4割という比率で、針葉樹はカラマツがほとんどで、残りが杉やヒノキ、赤松というところですね。戦後に切って植えた木が、間伐を経て大きく育ってきて今使える木としては本当にいい状態なので、これからは育てる以上に、活用して行く時代になってきているんです。



### 木を使う

**小池さん** (以下小池) 林産係には木材の担当者もいて、県内産材の利用拡大の補助事業もありますし、普及係も活用の支援をしていて、市町村とか民間の方にもベレットストーブや薪ストーブやボイラーについてのお話をしています。公共事業に木材を使って建てたりする事業も少しあって、市町村にお願いしながら県産材でつくった幼稚園とか学校は、どうでしょうかというお話もしています。

長野県でも一部に使われていて、鉄骨の柱を松材などで切り出してきた木で覆ったり、大ひさしの柱の外側の外装と、上の天井部分のところ、それから中の内装の一部を長野市の木材を使っています。

**善五郎** (以下善) 家具材も4%くらいあるみたいですが、一番多いのは建築材なんです。

**小池** 使われ方としては建築材が一番大きくて、紙に使われているのがどんどん落ちてきて、そのかわり石川県とか千葉県に持って行く合板の材が増えていっていますね。

昔前はロシアのカラマツ材が入ってきていたんですけど、入らなくなって、合板も中心は杉とかこの材でもいいんですけど、表と裏の挟み込むところは強度が必要なので、長野県産のカラマツが使われているんです。

広葉樹は薪になるのが多いんですが、フローリング材としての需要もありますね。

**善** 薪ストーブの普及で、薪をつくるために径が大きくても切っちゃうんじゃないかって心配も、実はしているんですけど。

**小池** それは大丈夫ですね。木の太いところは高く売れるので建築用材に利用して、先の細いところが薪に使われるんです。基本的には森林所有者

の方へできるだけ返そうということでも高く売れるものは高く売るといっていいんです。

**善** 県内産や、近くの材を使うことって、多分ほとんどの人が「いいことですね」と言っているんですけど、でも、そのことについて正直はっきりとした答えがあるのか少し疑問に思っているの、お考えを聞かせていただけますでしょうか。

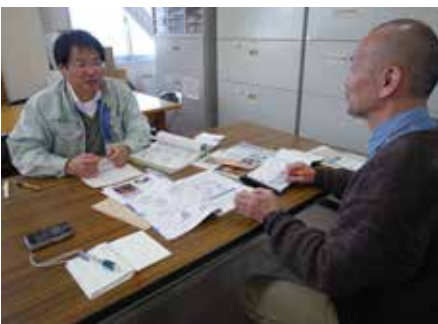
**小池** 都会にお住まいだと自分が山と全く関係ない人だとそのへんの説明が難しく、林業や国内の産業を守らないといけないとか、どうしても大卒のお話になってしまうんですね。

地元の方には、県産材の木を使って家を建てたり、燃料にするってことは、回り回って自分が持っている森林の価値を上げることになるんですよっていうお話をしています。

**善** あとは、日本の材料を使う方が、何千キロも離れたところから持ってきたものよりも馴染みがいいんじゃないかと、狂いが少ないっていうことも聞いたことはありますが。

**小池** 先ほどの薪ストーブの話ですけど、運搬するためにかかるものを考えると、裏山や近くの山の木を使った方が、エネルギーの負荷は少ないですね。どこかの国の資源を、日本は資源をもっているのに安いからといって食いつぶしているの、かっというのも疑問ですよ。

**善** それは本当に同感です。





インタビュー & 対談

長野森林組合 北部支所

赤松 玄人 さん

林務課普及係の小池さんからお聞きした  
長野県の産業としての林業の現場を訪問。  
12月の大雪の中、信濃町の山を案内してくだ  
さいました。

## 北部支所の管理する山

信濃町ですと、広葉樹と針葉樹の人工林と天然林が半々の割合ですね。森林の構成は、針葉樹ではカラマツと杉が約半ずつで、赤松やヒノキがわずかにあります。広葉樹はミズナラ、コナラを中心に多様な樹種に恵まれています。今、広葉樹の利用で相談を受けている企業があるので、皆伐（全体を切って山を更新すること）をしているんです。

なぜ皆伐かというと、カシノナガキクイムシという虫がたくさん長野県に入ってきてしまって、その虫にアタックされると素晴らしい巨木でも、あつという間に枯れてしまうんですね。がんばって大きく育った木を有効に使うことが最大の予防になるので、がんばってやっています。

## 木を切る現場へ

善 松葉屋が普段扱っているような大径木の広葉樹ばかりでなくとも、数年かけて、この木がこうなっただってというのを追って行きたいと思っています



木を切るのは一人の作業。切り倒した後は運びやすい長さに切り枝をはらいます。  
大雪の中とても過酷な現場でした。

んです。製材・乾燥だけでなく、自生している場所も見てもこういう条件でこの木はこうなっただってのも知りたくて。

**赤松さん**（以下 赤松）この木はこっちが南を向いていて、とか分かりますもんね。この辺りは雪が多くて寒くてっていう場所、厳しい環境ですけど、素材としてはいい方にふれると思うんです。

**善** 雪はお仕事には全く影響しないんですか？（この日は大雪でした）

**赤松** 雪は・・・寒くて嫌ですけど。

2つメリットがあつて、雪が積もると土壤に布団をかけた状態になるので、機械が入っても下を傷つけなくてすみますし、湿地であるとか、入れな

いところも雪があれば侵入して作業できません。あと、国立公園だと簡単に道をつくれないうんですよ。そういうところはある程度雪が積もるのを待って雪で道をつくって作業をして、溶けたら終わりと。

材料としても、冬に木が眠っているときに切ったものは優良です。特に広葉樹はきめんなんですよね。成長期に切った木を置いておいたら、すぐに虫に食べられて卵を生まれて・・・しばらくしたら粉が出て中がスカスカに、ということもありますから、利用するという面からも、冬が一番いい時期ですね。





インタビュー

株式会社ラポーザ

荒井 克人 さん

生き物としての樹々を教えてくれる人。

私たちが見過ごしている戸隠の森の姿を教えてください。雪深い1月、戸隠の森を案内していただきました。

## 戸隠という場所

昔、戸隠は海だったので、地殻変動で隆起して戸隠山はできたんです。海と分断された歴史があって、戸隠山と飯綱の毛無山のお碗状の窪地になっていて、そういうところって湿地になりやすいんですね。水っていうのは生き物が育つところには必須で生き物多様性って言い方をしますけど、生物層が豊かになるんですよ。

なおかつ針葉樹と広葉樹が混合していて、広葉樹が多くて餌になる実が多いですし、湿地上でモミとかスギばかりだとまた偏っちゃうと思うんですよ。鳥の単は針葉樹を使うことの方が多いんです。葉っぱが詰まっているから隠れやすいんですよ。

## 森の育ち方

最初はシラカバやミズナラが生えやすくて、イタヤカエデとかも同じ広葉樹ですけど成長が早いんですよ。その間にウワミズザクラとかキハダが少



木の高いところにはふっさりとした植物が。「ヤドリギ」は鳥が木の上で実を食べて種を残し、木の上で新しい芽を出して育ったもの。

しずつ伸びてきて、シラカバだと60年くらいが寿命ではたばた倒れていくんですけど、そうすると成長の遅かった広葉樹が伸びるんですね。広葉樹が生きているうちは針葉樹はほそほそと、ゆっくり伸びてきて、針葉樹は陰樹といって光があまり当たらなくても大丈夫で。広葉樹はその逆で陽樹なので日光が当たらないとダメになっちゃうんですけど。

そのうちに広葉樹と針葉樹が逆転して、陰樹が上で陽樹が下になっちゃうと広葉樹が枯れて針葉樹が残った林になる、極相林になるんですよ。

ただ、最初に出てきたミズナラはぐーんと伸びて寿命も長いので極相まで残ったりするんですけどね。

※森林がほとんど陰樹で構成され、樹種が変化しない状態になった森林。



この日の戸隠。空には晴れ間が見えましたが、時おり強い風が吹き、目が開けられないくらいの地吹雪が。静かな森が遠くから聞こえてくる風の音にふわっと包まれ、森に入った私たちはただただその中にじっとしているだけ。冬の張りつめた空気を体いっぱい浴びました。

株式会社ラポーザ(長野事務所)

〒380-0867

長野市住生地1423-2 グリーンディーヒル732

TEL : 026-219-5572

URL : <http://reposa.jp>



松葉屋通信23号でも荒井克人さんにインタビューをしました。バックナンバーをご希望の方は松葉屋へご連絡ください。

生物が多様で変化に富んだ戸隠の森は足を少し踏み入れただけでも様々な生き物に出会うことができます。1月の冬の森では、ホウの木から芽が出て、ゴジュウカラが木の上に。高い高い木のとっぺんにはヤドリギがオレンジ色の実をつけていました。

季節を通してひとつの森を見ることで、森の変化や生き物の姿から私たちが扱う木が、日々の環境に晒されながら生きる存在であることを改めて感じることができました。こうして育った木が生き物であるということを忘れないために、森や木のことを知るために、ラポーザの荒井さんに教えていただきながら松葉屋の森へいくツアーがスタートします。



# おくりもの展

こんな風でした！



昨年の暮れ、2回目になる「おくりもの展」がありました。いつものゆったりした松葉屋とは違う、活気に満ちた賑わい。作り手同士も仲良くなって、より楽しくなった様子をお伝えします。



和気あいあいと談笑しながら。



この3日間、松葉屋の中にできた小さなお店はカフェもふくめて全部で15。作り手に質問したり会話しながら、松葉屋店内をめぐっていると、本当にマルクトプラッツ（ドイツ語で市が立つ広場）みたいかな？ とちょっとうれしくなりました。そして何より、あちこちでみかける、こられた方々の笑顔や満足気な表情が、作り手と私たちにとても嬉しくなりました！こられた方も、作り手も、私たちも、みんながもっともっと、ワクワク、ドキドキするような、マルクトプラッツになるように、一つひとつのつながりを、大切にしていきたいと思えます。次回もどうぞ、お楽しみに。

最後みんなで、記念撮影。



歳では松葉屋からのおくりもの展。ホームスピンのマフラーやストール、こざん刺しのピン、ふわふわのぬいぐるみなど…。

松葉屋通信 VOL.31



発行所:

松葉屋家具店+くらし道具学研究所  
〒380-0841 長野市大門町 45

TEL : 026-232-2346

FAX : 026-237-4558

Email : since1833@matubaya-kagu.com

定休日: 水曜

発行日 2015年2月5日